前期日程

令和八年度入学試験問題

国　語（現代の国語・言語文化・論理国語・文学国語・古典探究）

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
二、解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
三、解答用紙は八枚です。
四、各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ二箇所あります。すべて記入しなさい。
五、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（本文は、二〇二五年三月に発表されたものである。）

大阪を歩いていると、しばしば、ミャクミャクくんにソウグウ①する。ミャクミャクくんとは、二〇二五年四月から半年間にわたって開催される、大阪・関西万博の公式キャラクターだ。四肢を持つ青い身体で、顔の外周をボコボコとした赤い輪が覆っている。赤い輪にはいくつもの目玉が埋め込まれていて、それらはすべて違う方向を見ている。赤い輪は、見方によっては球体状の腫瘍が連なっているようにも見えるし、あるいはその中を血液が流れているようにも見える。一方、青い身体は固形を維持してはいるものの、ところどころから水滴が滴っている。おそらく皮膚のようなものはなく、常に体液を流動させながら、個体を維持しているに違いない。

このように書くと、ミャクミャクくんは不気味なキャラクターだと思われそうだ。実際、不気味ではないと言えば、嘘（うそ）になる。しかし、彼はにんまりと笑っていて、とても上機嫌そうである。愛嬌（あいきょう）があると言われれば、あるかも知れない。しかし、街の至る所に顔を出している彼をみていると、彼が無限に増殖しているのではないか、という不安に駆られる気もする。いや、別に増殖していてもいいのだけど。

今回の万博のテーマの一つが、Society 5.0 の実証実験である。筆者は別の機会に、Society 5.0 の概念が潜在的に抱えている倫理的な問題を論じたことがあった。今回の万博において、それはより鮮明な形で、あるいは一定の変容をトゲ②ながら、浮かび上がっているように思える。本稿ではそうした問題について考えてみたい。

まずは、Society 5.0 に対する筆者の立場を説明しておこう。

日本政府は、第五期科学技術基本計画において、日本が目指すべき未来の社会像として、「Society 5.0」という概念を提示した。「5.0」は、産業の形態に基づいて評価された人類の社会の段階を示すものであり、シュリョウ③社会が Society 1.0、農耕社会が Society 2.0、工業社会が Society 3.0、私たちが現在立っている情報社会が Society 4.0 として定義されている。Society 5.0 は

その次にくる未来の社会である。それは具体的には、「ＩＣＴを最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす『超スマート社会』」として定義される。その社会のあり方は次のようにも説明されている。

> 必要なもの・サービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といった様々な違いを乗り越え、活き活きと快適に暮らすことのできる社会

ここで注目するべきことは、必要なものを必要なだけ提供し、言い換えるなら無駄なものや不要なものを否定する社会こそが、(1)超スマート社会である、ということだ。たとえば、交通渋滞で待たされることは時間の無駄である。それならば、道路に無数のセンサーを備え付け、リアルタイムで道路の状況を把握すればよい。このとき、現実世界の道路の状況はセンサーによって情報化され、サイバー空間で処理される。そのうえで、経路の提案が実世界のドライバーに提供されることで、ドライバーの課題は解決される。

では、そもそもなぜ、超スマート社会は要請されているのだろうか。それは、現在の社会においてはいたるところに格差が存在し、不便な生活を強いられている人も数多くいるからだ。たとえばモビリティ[注1]の問題は、地域間格差を④ロテイさせる最たる課題である。それに対して、誰もがどこにいても便利に生活することができれば、そうした格差を是正することが可能になる。この意味においてSociety 5.0は「違いを乗り越える」ことを目指す社会のあり方なのだ。

こうした社会を実現するためには、フィジカル空間が隈（くま）なく情報化され、他の様々な情報と組み合わされることが必要である。たとえば道路の渋滞情報をより正確なものにするためには、その日にどこでどんなイベントがあるのか、その日の天候はどのような具合なのか、その道路に整備不良の自動車がどれくらい存在するのか、その道路を走る自動車のなかに事故リスクの高

いドライバーがどれくらい存在するのか、そうした様々な周辺情報を勘案する必要がある。そしてそれを収集するためには、道路に備え付けたセンサーだけではなく、他の様々な情報源を横断的に活用する必要がある。超スマート社会においては、そのようにして、「従来は個別に機能していた『もの』がサイバー空間を利活用して『システム化』され、さらには、分野の異なる個別のシステム同士が連携協調することにより、自律化・自動化の範囲が広がり、社会の至るところで新たな価値が生み出されていく」のである。

ところで、こうした超スマート社会において、人間はどのように生きることになるのだろうか。右のドライバーを例にとって考えてみよう。ドライバーは、超スマート社会以前には、道路状況を自分で予測し、経験に基づきながら、自分なりの推測をすることによって、運転経路を設計してきた。その推測の信頼性はとても疑わしいものではあるが、しかし、ときとして有効に機能することもある。経験の蓄積によってその信頼性は改善されていく。熟練したタクシードライバーは、カーナビゲーションが提案する経路を無視して、自らの判断力だけを頼りに最善の経路を見つけ出すことができる。しかし、超スマート社会において、もはや人間はそうした推理を働かせることを必要としない。ドライバーはただ情報を受け取ればよいのだ。その情報が正しいか否かを、自分で思考する必要はない。

超スマート社会は、人間が自分で考えることを必要としなくなる社会である。思考する時間は無駄であり、思考すること自体が不必要なのだ。むしろ、人間が自分の不確かな思考によって例外的な行動をすれば、超スマート社会においてシステムによってなされる予測を不安定なものにする。したがってそこでは人間はただシステムに従うべきである。それによって、かえってシステムから受けられる恩恵は増大するからである。この意味において、超スマート社会はシステムへの無批判な従属を構造的に促すものである。そのようにして、フィジカル空間とサイバー空間が融合する超スマート社会においては、人間自身もまたそのシステムへと融合していくのである。

しかし、そうであるとしたら、私たちはそのシステムの妥当性そのものを疑うことができなくなる。そのシステムが、何らかの倫理的に許容されない暴力に加担するものであったとしても、それを批判することができなくなってしまうのだ。たとえば、

犯罪捜査を理由とした被疑者の長期にわたる拘禁など、違法ではないが倫理的な懸念のある事象に、誰も疑問を寄せなくなっていく。しかし、超スマート社会においてはあらゆる情報が融合し、システム化している以上、どんなにささやかで慎(つつ)ましい生活を送っていても、それはこの世界の片隅で行われる暴力と結びついているのである。このようにして、知らず知らずのうちに暴力に加担してしまう事態を、筆者はかつて、「スマートな悪」と呼んだ。

もちろん、現在の社会に存在する格差が是正されることは必要だろう。新しいテクノロジーが、いま不便な生活を強いられている人の課題を解決することは、重要だろう。しかし、だからといって、社会の中心的な価値としてスマートさを位置づけなければならないわけではない。私たちは、そのように未来の社会像を単純化することに、大いに慎重になるべきである。それが筆者の基本的な立場である。

さて、以上のようなSociety 5.0のビジョンは、大阪・関西万博でも重要なテーマとして位置付けられている。

二〇二五年日本国際博覧会、略称「大阪・関西万博」は、二〇二五年四月一三日から一〇月一三日にかけて、大阪市臨海部に造成された人工島である夢洲(ゆめしま)で開催される。テーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン(Designing Future Society for Our Lives)」であり、サブテーマとしては、「Saving Lives(いのちを救う)」、「Empowering Lives(いのちに力を与える)」、「Connecting Lives(いのちをつなぐ)」という三つが掲げられている。また、大会のコンセプトは「People's Living Lab(未来社会の実験場)」である。想定される来場者数は二八二〇万人と見積もられている。「基本計画」では、万博の開催意義として、メインテーマである「いのち輝く未来社会」に向けた問題提起とともに、「ＳＤＧｓ達成・ＳＤＧｓ＋ｂｅｙｏｎｄへの飛躍の機会」、「日本の飛躍の契機に」と並んで、「Society 5.0実現に向けた実証の機会」が挙げられている。

実際に、今回の万博では、「チケッティング、ＭａａＳ(マース)、自動運転等の各種サービスを連携させる情報通信共通基盤(万博ICT-PF(プラットフォーム))」の設計や、「会場内の情報、周辺の観光情報等を、ＡＩを活用し最適化し提供するアプリ」の構築、さらに「高速・大容量、低遅延、多数同時接続の５Ｇ等ネットワーク」の整備や、「清掃、ごみ運搬、物流、モビリティ

等、実用化が進んだ分野の人と共存するロボットや言語の壁を感じさせない環境を実現する自動翻訳技術等」の導入が検討されている。

第五期基本計画の段階では、単なる構想に過ぎなかったSociety 5.0が、今回の万博においていよいよ実装可能なテクノロジーとして現実となる。夢洲はそのために本格的な実験の地として位置付けられている。超スマート社会を構成すると考えられる、最先端のテクノロジーによってデザインされた会場を、参加者がどのように利用し、どのようなサービスが有効に機能し、また機能しないのか。また、そこで生まれる予想外の課題や、利用者が抱く新たなニーズは何なのか。万博はそれを試す機会なのだ。このように考えていくと、今回の万博の本当のテーマは、むしろ「Society 5.0の実験」であるようにさえ思えてくる。

そうであるとしたら来場者は、どのように万博に参加することになるのか。それは、万博のあり方を大きく変更させる発想であるように思う。

鹿島茂によれば、歴史的に眺めるとき、万博が革新的であった点は、実用工芸品をあたかも芸術作品であるかのように展示した点にある。そもそも博覧会を意味する「exposition」とは、芸術作品の展示会を意味していた。それに対して、人々が実用工芸品に接するのは市場であり、そこで物品はあくまでも購入されるために配置されていた。したがって、市場と博覧会とでは、来場者が果たす役割が異なっている。市場に参加する者は購入者として振る舞う。しかし、博覧会に参加する者は鑑賞者として振る舞うのである。

しかし、今回の万博は実験場である。そこでは、人々がきちんと超スマート社会のテクノロジーに対応できるのかが、テストされる。あたかも、薬物を投与された上で迷路を走らされる、実験用マウスのように。万博に参加する人々はマウスなのであり、つまり実験体なのである。

(2) 鑑賞者であることと、実験体であることの間には、大きな断絶がある。鑑賞者であるとき、人間は展示品に対して一方的にまなざしを向ける存在である。それに対して、実験体であるとき、人間はむしろその振る舞いを研究者によって観察される対象であり、まなざしを向けられる存在になる。この意味において来場者が置かれている状況は一八〇度変わってしまう。鑑賞者から

実験体へと変容するとき、人間はまなざしを向ける者から向けられる者へと変容するのである。

これまでの万博も、多かれ少なかれ、来場者によって新しいテクノロジーを実験していただろう。今回の万博が新しいのは、おそらく初めて、来場者を実験体として捉えることが全面的に前景化されている点である。

ミャクミャクくんは、こうした万博における観客のあり方を、象徴する存在であるようにも思える。

もともとミャクミャクくんは、万博のロゴマークから派生したキャラクターである。ロゴマークは、ミャクミャクくんの顔を覆う赤いリングだけが独立したようなデザインだ。このデザインに込められたメッセージは、大きく分ければ、二つある。一つは、サイエンス、テクノロジー、エンターテイメント、アート、クリエイティブがもたらす感動が、「人の身体のずっとずっと奥深くにまでとどいて、いのちをささえているＣＥＬＬ(細胞)たちにも元気をあたえてくれる」ということ。そしてもう一つは、「一人ひとりの個性が躍動しながら集まって、繋(つな)がって、そこにはきっと、いのちの輝きがあふれている」ということだ。すなわち、一方において人類の知的営為が細胞へと働きかけるものであり、他方においてそうした知的営為の主体である人間は相互に繋がっていくものである、ということだ。

ミャクミャクくんもまた、こうしたロゴマークのメッセージを共有している。公式ホームページでは、次のように説明されている。

「ミャクミャク」について

細胞と水がひとつになったことで生まれた、ふしぎな生き物。その正体は不明。

赤い部分は「細胞」で、分かれたり、増えたりする。

青い部分は「清い水」で、流れる様に形を変えることができる。

なりたい自分を探して、いろんな形に姿を変えているようで、人間をまねた姿が、今の姿。

但し、姿を変えすぎて、元の形を忘れてしまうことがある。

外に出て、太陽の光をあびることが元気の源。雨の日も大好きで、雨を体に取り込むことが出来る。

開幕前から自分のことを皆さんに知ってもらい、二〇二五年に開催される大阪・関西万博で多くの人に会えることを夢見ています。

ミャクミャクくんの身体には固定された形がない。それは任意に拡張したり変容したりする。現在の姿も、一時的に人間を模倣しているだけであって、その気になれば別の姿になることもできる。では本来の姿は、いったい何なのだろうか。公式の説明によれば、彼はそれを忘れてしまうこともある。

ミャクミャクくんの流動的な身体は、万博における生命への基本的な解釈を反映したものだろう。「基本計画」によれば「私たちのいのちは、この世界の宇宙・海洋・大地という器に支えられ、互いに繋がりあって成り立っている」。ここで念頭に置かれている「いのち」とは、特定の個体の生命ではなく、そうした個体の相互依存によって成立しているシステムの総体を指している、と考えられる。実際、「テーマ事業」の一つである「いのちを守る」というテーマの企画として、「『わたし』の中の『あなた』を認めるいとなみの行方に、多様ないのちが、それぞれに、護(まも)られてゆく未来を描く」というプロジェクトが、また「いのちを響き合わせる」というテーマの企画として、「個性あるいのちといのちを響き合わせ、『共鳴するいのち』を共に体験する中で、一人ひとりが輝くことのできる世界の模式図を描く」というプロジェクトが企画されており、これらの事業において「いのち」は独立した個体の生命を超えたものとして捉えられている。

ミャクミャクくんの顔を覆っている赤い輪は、おそらくその一つ一つが、細胞である。それは増加するだけではなく、分裂もする。しかしその細胞には眼が備わっていて、その眼はそれぞれ別の方向を向いている。つまりそれらは、異なる眼差しを発している。サルトルが指摘するように、眼差しはその向こうに主体の存在をシサ⑤する。したがって、異なる眼差しを発する細胞たちは、その一つ一つが、異なる主体であると考えられる。しかし、それらはあくまでもミャクミャクくんという一つの存在に統

合されている。[3] ミャクミャクくんの身体は、主体の独立の不可能性、「私」と他者を区別する境界の曖昧さを、そのうちに宿しているのだ。そしてこのことは、万博がいうところの輝く「いのち」が互いに響き合う様を表現しているのではないだろうか。

こうした万博の生命観は、興味深い仕方で、Society 5.0 の理念と軌を同じくする。前述の通り、超スマート社会はフィジカル空間とサイバー空間の融合に基づき、システムへの人間の同調を促す。同様にして、万博において生命は様々な生物の相互依存に基づく「いのち」へと還元される。つまり人間は、一方においてはＩＣＴシステムへ、他方においては生態系システムへと融和されるのであり、そしてそれはとりもなおさず、ＩＣＴと生態系の融和を意味するのだ。

テーマ事業の一つ、「いのちを磨く」では、「自然と人工物、フィジカルとバーチャルの融和により、自然と調和する芸術の形を追求し、新たな未来の輝きを求める」というプロジェクトが行われる。ここでは、超スマート社会を特徴づける説明の構造が、ほとんどそのまま、「いのち」の説明に応用されている。

あるいはこう考えることもできるだろう。第五期科学技術基本計画から万博にかけて、Society 5.0 の概念は、単にフィジカル空間とサイバー空間の融合を促す概念ではなく、生命と生命の融合、ＩＣＴと生態系の融合、自然と人工物の融合までをも要請する概念へと変容した――このように解釈したとしても、それは決して不自然ではないのではないだろうか。

もちろん、万博は単にテクノロジーを賛美しているわけではない。むしろその反対であり、人間のテクノロジーによる生態系への脅威こそが、「いのち輝く未来社会」という中心的なテーマへの問題意識をなしている。「基本計画」では次のように説明されている。

> いのちそのものを改変するまでの高度な科学を築き上げた私たちには、人類が生態系全体の一部であることを真摯に受けとめるとともに、自らが生み出した科学技術を用いて未来を切り開く責務があることを自覚し、行動することが求められる。自然界に存在する様々ないのちの共通性と相違性を認識し、他者への共感を育み、また多様な文化や考えを尊重しあ

うことによって、ともにこの世界を生きていく。そうすることによって、私たち人類は、地球規模での様々な課題に対して新たな価値観を生み出し、持続可能な未来を構築することができるに違いない。

私たちに持続可能な未来を構築する責任がある、という主張に対して、筆者は完全に同意する。そしてそうした責任が、他者への共感や文化の多様性への尊重を伴わなければならない、ということももっともだ。しかし、人間を幾重にもシステムに同調させようとする今回の万博が、そうした他者性や多様性を、真剣に主題化しているようには思えない。

ミャクミャクくんのイメージのもとになっているのは動脈と静脈である。それは私たちの体内に潜む生理的な器官だ。動脈と静脈は、人類に共通の器官であり、あるいはそれを血管として捉えるなら、ほとんどすべての動物に共通する器官である。だからこそそれは、「私」と他者の境界を超えた、あるいは人間と自然の垣根を超えた、「いのち」の象徴となる。「私」もあなたも、皮膚を剝げばそこにあるものは同じなのだ。だから「私」とあなたは互いに対立するのではなく、一つの「いのち」として繋がることができる――ミャクミャクくんのデザインには、そうしたメッセージが込められているように思う。

しかし、現実の社会において、私たちは動脈と静脈を曝け出して生きているわけではない。その上には皮膚があり、そして衣服が纏われている。そうした皮膚と衣服においてこそ、人間の多様性が表現されているのだ。たしかに、皮膚と衣服は、「私」と他者の間に境界を引き、両者を引き裂き、区別する。しかしだからこそ、「私」は他者を、自分とは異なる存在として尊重することもできるようになる。

私たちが、皮膚と衣服を脱ぎ去り、動脈と静脈を剝き出しにすることによってのみ共生できる存在だと考えることは、あまりにも悲観的であり、というよりも敗北主義的である。なぜならそれは、私たちが皮膚と衣服の多様性を決して乗り越えられない、という諦めを前提にしているからだ。そのような発想から、「多様な文化や考えを尊重しあう」ことなど、とても導き出せないように思える。そして、(4)私たちはそこまで他者性に対して脆弱なわけではないと、筆者は信じたい。

持続可能な未来を構築する責任を果たすには、私たちが置かれているシステムを批判的に問い直すことが不可欠である。そし

てそれは、システムを「私」とは違った視点から眺めることができる他者との対話によって、初めて可能になるはずである。もしも「私」も他者も同じようにシステムに同調していたら、そこに対話が成立する可能性はない。「私」と他者は、あたかも互いが同じ存在であるかのように共感することはできるかもしれない。しかし、互いの意見をぶつけ合い、互いの声に耳を傾け合い、互いを理解し合おうとする泥臭(どろくさ)い努力を発揮することはできない。

だから、筆者はこう思う。(5)私たちはミャクミャクくんと「いのち」の一員として融和するのではなく、彼と友達になるべきなのだ。彼と繋がり、輪郭を重ね合うのではなく、握手を交わし、テーブルを挟んで対面するべきなのだ。彼が、その仮面のような笑顔を解き、(6)人間の姿を模倣する必要などないことに気付き、なんだかよく分からない姿になりながら、「いのち輝く、って、なんのことかねぇ(笑)」と問い直せる社会――それが、望ましい未来の社会なのではないか。

(戸谷洋志「生命・他者・倫理――あるいはミャクミャクくんと友達になることについて」による。)

注1　モビリティ――乗り物や移動手段のこと。

問一　傍線部①～⑤のカタカナを、漢字に直せ。

問二　傍線部(1)「超スマート社会」の説明として適当なものを、次のア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア　地域間格差のような現代社会にある格差や、不便な生活の解消を目的とする社会。

イ　あらゆる情報が融合されることによって、暴力が倫理的に正当化されてしまう社会。

ウ　人間が自分で考えることを必要とせず、人間をシステムに従属させようとする社会。

エ　熟練したタクシードライバーのように、経験の蓄積によってシステムが改善される社会。

オ　サイバー空間とフィジカル空間とを融合し、人々に豊かさをもたらす社会。

問三　傍線部(2)「鑑賞者であることと、実験体であることの間には、大きな断絶がある」とあるが、それはどういうことか、前後の文脈を踏まえて説明せよ。

問四　傍線部(3)「ミャクミャクくんの身体は、主体の独立の不可能性、「私」と他者を区別する境界の曖昧さを、そのうちに宿している」とあるが、これはどういうことか、一〇〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部(4)「私たちはそこまで他者性に対して脆弱なわけではない」とはどういうことか、八〇字程度で説明せよ。

問六　傍線部(5)「私たちはミャクミャクくんと「いのち」の一員として融和するのではなく、彼と友達になるべきなのだ」とあるが、筆者はなぜそう考えるのか、本文全体を踏まえて一〇〇字程度で説明せよ。

問七　傍線部(6)「人間の姿を模倣する必要などない」とあるが、なぜか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　筆者は人間の輪郭を真似する姿のミャクミャクくんではなく、よくわからない姿のミャクミャクくんも私たちと同じ存在であることを自覚し、友達になりたいと考えているため。

イ　筆者は人間の模倣をするミャクミャクくんではなく、本来の姿でシステムを批判的に捉え直しながら、表面的な姿の違いを乗り越え同じ生命として友達になりたいと考えているため。

ウ　筆者は人間と話しあうための姿のミャクミャクくんではなく、一つの「いのち」であるミャクミャクくんとシステムを通して繋がり合うことで、友達になりたいと考えているため。

エ　筆者は人間が共感できる姿のミャクミャクくんではなく、よくわからない姿のミャクミャクくんとシステムの在り方について話し合い、友達になりたいと考えているため。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「すみません。鳥が死んでいるので、回収に来てもらえますか?」

鳥、ということは新館の方だろうと思いながら場所を尋ねると、やはり新館東側の渡り廊下付近だと言う。すぐに向かいますと告げて、鹿田(しかだ)は内線を切った。

手にポリエチレン手袋をはめ、ビニール袋と新聞紙、ステンレスのちり取りとトングを持ち、「鳥の死体が出たらしいんで回収行って来ます」と誰にというわけでもなく清掃待機室全体に向けて声をかけると、数人から「はーい」とまばらな返事があった。

朝から夕方までと、昼から夜までの二交代シフト制で勤務する十人のスタッフは、全員が五十代後半から六十代の同世代で、同じ会社から派遣されている。今は三限後の学生の休み時間で、廊下もトイレも人通りが多いからこうして待機しているが、あと十分もすればまた各々が持ち場へ戻っていく。鹿田の今日の担当は文学部棟の五階から地下二階までの男子トイレ掃除と廊下のゴミ回収だ。鳥の回収を終えたらすぐに向かわなければ、退勤時間までに終わらないな、と考えながら足早に新館へ向かった。

渡り廊下へ踏み入ると、道の先に立つ職員と目が合った。なぜか男女二人いるが、軽く目礼され、男性の方が電話をかけてきた管財課の職員だと分かる。鹿田も小さく頭を下げながら近寄り、

「お疲れさまです。それで、どこですか」

と尋ねてすぐ、職員二人の後ろで立ちすくんでいる人間に気付いた。細い体だ、とまず思い、顔を見ると泣いていたのでぎょっとする。男子学生だった。唇を固く結んだまま、涙だけをとうとうと流している。Tシャツの肩のところで時折顔を拭(①)うせいで、そこだけグレーが色濃く染みになっていた。

なんだこの子はどうしたんだ、と言いたげな驚きが顔に出ていたのだろう。女性の方の職員が鹿田に小さく頷(うなず)いた。しかし、

「この学生が第一発見者なんです」
と、まるで殺人事件の現場へ来た刑事のような物言いをされ、ますます困惑する。そもそもあなたはどうしてここにいるのだ、と思っていたら、
「この子が鳥がガラスにぶつかって落ちたのを見てショックを受けて、泣いているところにわたしが通りかかって、管財に連絡したんですよ。それで、そちらに回収の依頼をしてもらって」
とスマホを片手に掲げながら説明された。鹿田はなるほど、と短く返事をする。連絡が済んだのなら管財に任せればいいものをと思ったが、学生が泣いているために離れにくかったのかもしれない。流れで学生の方を見るが、そちらは口を開く気配はない。ハンカチは持っていないのだろう。指でしきりに目元をこすっている。
「鳥はあそこのガラスにぶつかって、そのまま下に落ちて、今はあの花壇に」
職員が指し示す方へ視線を遣ると、うろこ模様の茶色い羽を中途半端に広げた形で、二メートルほど下に鳥が転がっているのが窓ガラス越しに見えた。前にも回収したことがある。キジバトだ。
「分かりました。じゃあ、後はやっておきますんで」
と告げ、外へ出るため一度旧館へ戻る。建物の外をぐるりと回って渡り廊下の方へ向かうと、三人はまだ同じ場所からこちらを見ていた。鹿田は視線を逸らし、ぐんぐん進んでいく。頭上から見下ろされているのが分かり気まずい。
渡り廊下は透明なストローのようだ。いや、ストローにしては少し太いか。底面以外の三面がガラス張りになっており、宙に浮いたそれが、同じく一面ガラス張りの新館につながっている。去年竣工したばかりの十階建ての新館は、建築学科の特任教授が特別にデザインしたと学内掲示で喧伝されていたが、鹿田には都会でよく見るガラス張りビルとなにが違うのか分からない。大学の校舎というより丸の内や品川にあるオフィスビルのようだ。そして他のガラス張りビルと同様に、ここでもたくさん鳥が死ぬ。あまりに透明のガラス面が広すぎるから、空間だと勘違いし、激突してしまうのだ。
この一年の間に、鹿田が鳥を回収するのはこれで三度目だ。他の清掃員も鳥を回収しており、毎月あげることになっている清

掃報告書に、反射シールを窓に貼ったり色のあるカーテンをかけたりといった対策をすることで、鳥の激突被害が避けられるのではないか、と提言を書いたが、それがどう受け取られたのか、そもそも読まれているのかさえ、反応がないから分からない。ひどいことだと思うが、思うだけだ。報告書に書く以上のことはしない。ここは職場で、鹿田の仕事は清掃と、空気に溶けて見えなくなるほど美しく磨かれたガラスに、激突して死んだ鳥を回収することだった。

渡り廊下の両脇にはハナミズキが等間隔に数本あり、四月の今はちょうどおしろい色の花が咲いている。木々の足元を埋めるように煉瓦で囲まれた花壇があって、年中青々とした葉が茂る低木や、季節の花が植えられている。鳥はその花壇の中と煉瓦の上にちょうど半分ずつ載るように転がっていた。羽を広げたまま、頭を上に反らした角度で固まっている。

鹿田はトングの先で茶色の毛がむくむくと広がる胸の辺りを軽くつついてから、力を込めて胴体の真ん中を掴み、ちり取りに載せた。すぐに上から黒のビニール袋を被せる。念のため周辺を見渡すが、羽根が飛び広がってはいないようだ。

花壇から数歩離れて渡り廊下を見上げると、鹿田の視線に気づいた中の三人がぺこりと頭を下げてきたので、鹿田も無言のまま会釈を返す。ガラス越しに見た学生はようやく涙が止まったようだったが、離れた場所からでも目元が赤く腫れているのが分かった。恐らく入学したばかりの一年生なのだろう。ほっそりした体つきからだけでなく、まだこのキャンパスで正しい重力を獲得できていないような立ち姿からそう判断する。

ああいう不安そうな新入生を、毎年四月には大勢見かけるのに、五月の連休明けには揃ってみんな普通の大学生の顔になっている。なにもかもに対して平気そうで、意識して軽薄を気取っている、けれどいい子であることからも逃れられず、居心地が悪いまま収まった顔に。ゴールデンウィークの間になにがあるというのだろう。鹿田は毎年不思議で仕方ない。あるいは、連休を超えても不安から脱出できなかった新入生はそのまま大学に来なくなるのかもしれない。その結果、平気な顔をした学生だけが残る。全員が突然変貌するよりは、そちらの想像の方がしっくりくるが、所詮は大学生をやったことのない自分の考えだ、とばかばかしい。鹿田は三人に向けて頭を下げたまま踵を返し、手に持ったちり取りのバランスを崩さないよう注意しながら、清掃待機室へ戻った。

それにしたって、泣くほどのことではないだろう。鳥の回収をしてから数日経っても、鹿田は時折あの大学生のことを考えた。今日は水曜日で、鹿田の担当は理工学部棟の六階から十二階までの男子トイレ掃除と廊下のゴミ回収だった。ゴミ回収用のカートをがらがらと押してエレベーターに乗り込む。回収カートは、スーパーのショッピングカートを二つつなげたくらいの大きさの箱の形をしている。一度、すれ違った学生たちが「あれ乗ってみたい」と話しているのが聞こえた。立ったまま詰めれば四、五人は乗り込めるかもしれないが、そんなに重たくては押して歩けないだろうな。四人くらいなら押せるか。いや、押して歩けるのは頑張っても三人までか――現実に起こるはずもない状況を真剣に想像しながら、手足はさっさと仕事を進める。

理工学部棟は築三十年ほどの古いマンションみたいなデザインで、窓ガラス以外にガラス面はないし、窓ガラスも半透明で存在感があるので、周辺で鳥の衝突被害が出たという話は聞いたことがない。十四階建てのうち一階から十階まで教室が入っているので、四台あるエレベーターは上階の教室へ向かう学生たちでいつも混雑していた。鹿田たち清掃員は、休み時間だけでなく、授業開始から十分間と、授業が終わる十分前からも、エレベーター使用を避ける。授業時間の真ん中の、人通りが一番静まる時を狙って、沈黙したキャンパスの中を影のように移動した。

(1) 彼が鳥の死に驚いて泣いてしまったのは、ここが都会のオフィスビルみたいなキャンパスだからではないだろうか？　アクセスのいい都内の一等地にあり、限られた土地に十階建て、二十階建てのビルを何本も立て、縦に縦に人間を詰め込んでいる。

鹿田がこの大学の前に派遣されていたのは、埼玉に広い敷地を持つ大学だった。キャンパスの裏手に小山まである自然豊かな立地で、そこでは鳥どころかタヌキや猫や野ネズミの死体を回収することがあった。鳥もキジバトだけではなくて、ツバメやトンビやアカハラや、一度だけではあるけれどフクロウが木の根元に落ちていたこともあった。キャンパスの中を校舎から校舎へ移動していく学生たちは、自転車を使っていた。広場や校舎の陰や植え込みの中になにかが死んでいると連絡を受けると、鹿田たち清掃員も自転車に乗って駆け付けた。

回収した動物の死体は、山の麓に穴を掘って埋めた。大学の敷地内ではあるけれど、ゴミ集積場と業務用トラックしか入らない裏側で、学生はもちろん一般の教職員だってやって来ることはない場所だった。

落ち葉でふんわり盛り上がった土は柔らかく、死んだ生き物がこうして地面の下へ潜っていくのは、当たり前で自然のことのように思えた。ビニール袋にくるんで可燃ごみとして集積されるよりは、処理する鹿田の心も安らかだった。あそこでの動物の死はさほど恐ろしくはなかった。ショックを全く受けないというわけではないだろうけれど、あの学生だってもし通っていたのが田舎のキャンパスだったら、あんなふうに泣き乱れることはなかったんじゃないか。鳥の死に泣いたのは、ここが都会の中だからじゃないか。

多分そうだな、とクリーム色の薄暗い廊下を歩きながら一人納得する。昔通っていた総合病院の廊下に似ている、と理工学部棟に来る度に思うことを今日も考える。三十歳から二十年間タクシーの運転手をやっていたが、目を悪くして辞めた。視野の端が極端に狭くなり、日常生活には支障ないが、長時間の運転は危険だと診断された。廊下を進む。七階にある共同研究室から大量の布巾が②ハイキで出されるはずだから、ゴミ集積場までカートを押して二往復しないといけないだろう。布巾なんて洗えば何度でも使えそうなものだけれど、毎週必ず大量にハイキされる。一体なにに使っているんだか大学に通ったこともない自分には見当もつかないが、誰に聞けるわけでもない。教室の扉は上半分がガラスになっていて中を覗(のぞ)ける。学生たちがずらりと並んで座っている。寝ていたりスマホをいじっている者も多いが、わりと真面目に前を向いている学生だっている。七階の廊下に二カ所あるゴミ箱からゴミを回収したら、案の定それだけで回収カートがいっぱいになった。腕時計にちらりと目を遣る。今ならぎりぎり、授業時間中にここまで戻って来られるだろう。

地下一階で降り、地下駐車場へ続く教職員用通路を通って、ゴミ集積場へ向かう。学生の往来を禁止しているからなのか、急に殺伐とした空気が③タダヨう。なににも優しくないという顔で歩く数人の職員とすれ違う。鳥の回収を頼まれていない時の鹿田には、会釈すらしない職員の方が多いが、こちらはなんとなく小さく頭を下げている。会釈しているんだか、俯(うつむ)いているだけなのか、どちらとも取れる角度をキープして歩いていると、

「あ、鹿田さん。こんにちは」

と声をかけられた。ぱっと顔を上げると、滝(たき)がワイシャツの胸元で小さく手を挙げて立っていた。ああどうもお疲れさまで

す、と返事をしながら近寄って行く。

滝は去年まで管財課にいた職員で、清掃員のシフトや給与の管理業務を担当していた。清掃員のシフト希望は鹿田が取りまとめて出していたので、滝とやり取りをすることも多かった。滝は三十歳を過ぎた頃だが、首から青い紐のネームホルダーを下げていなければ、就活セミナーに出ている学生と見間違えるほどに若い。

タクシーの仕事をしている間は、二十代も三十代も同じように見えたものだが、大学の清掃に入るようになってからは、二十一、二歳と、二十三歳以降の若者の区別がなんとなくつくようになった。三十代とはもちろん全然違う。しかし、滝は妙に④清々しい幼さをまとっているように鹿田には思えた。無表情ですれ違う他の職員と違って、多少なりとも表情の入った顔を向けてくる存在だからだろうか。経理課へ異動してからも、学内で見かけるとこうして声をかけてくる。

「そういえば総務の同期から聞いたんですけど、この間、新館の方で窓ガラスにぶつかって死んだ鳥を見て、泣いちゃった学生がいたとか。清掃さんに回収してもらったって言ってましたけど、もしかして？」

鹿田は頷いて見せる。泣いている学生の傍で呆然と立っていた、女性職員の顔が頭に浮かんだ。あれは滝の同期だったのか。

「それ、わたしですね。回収したの」

「ああ、やっぱり！　男性の方だったって言ってたから」

と滝は続けたが、清掃員は男女半々五人ずついるので、五分の一の確率はさほど高いとは思えない。入れ替わりもあり、滝が顔と名前を一致させて覚えている清掃員が、たまたま自分を含む数人だけなのかもしれない。

「あの学生、前日にペットのインコを亡くしたばかりだったみたいなんです。ぼくも知らなかったんですけど、インコって長生きなんですね。十五歳だったって」

インコ……、と思わず声に出してつぶやく。

「三歳とか四歳とか、そのくらい小さい時から一緒に育ったってことでしょう？　それはつらいですよね。でも授業があるからなんとか登校して来て、そうしたら目の前で鳥が。驚いたでしょうし、ショックは大きかったと思います。だいぶ取り乱して

いたって聞きました。鹿田さんが鳥の死体を回収してくれて、ようやく落ち着いて泣き止んだ後で、職員と話したみたいです」

「そうだったんですね」

と相槌を打ち、薄情だったかと思い、

「かわいそうにね」

と付け加える。滝はほんとにねえ、と同意して見せると、鹿田さんも大変でしたね、それじゃあまた、と言い残して去って行った。

おれも大変だったんだろうか。鹿田は考える。別に大変だったことなんてない。大学内で動物が死ねば、それはゴミで、こんな都会のキャンパスじゃ、土には埋めてやれないから、全部まとめて可燃ごみになる。可燃ごみを回収して捨てるのは、自分に任された仕事だった。

それからも、鳥は時々死んだ。鳥からしたらわけがわからないだろう。ただ空間があり、そこを飛んで行こうとしたら死ぬのだ。それとも、透き通るガラス窓に衝突する寸前、そこが空間ではないことに気付いただろうか。気付いたって止まれないギリギリのところであるなら、いっそ気付かず、なにも分からないまま死んでしまった方が恐怖は少ないのかもしれない。

(2) 清掃の仕事はいい、と鹿田は思う。水を撒いた床をブラシでこすり、雑巾で手洗い場の周辺を拭く。鏡は雑巾ではなく、専用に決められた布で曇りを取った。トイレットペーパーを補充して掃除用具をしまった。用具入れの扉の内側には、そこを開ける学生に対して〈トイレットペーパー持ち出し禁止〉と注意書きが貼られているが、注意したって持っていくやつは持っていくし、何年も貼られたままで色あせた注意書きは、説得力を欠いていた。手を洗いトイレを出て、廊下に置いた清掃用具カートからモップを取り出す。廊下のモップがけをしながら、教室の前をいくつか通り過ぎた。大教室からマイクを使って話す教員の声が漏れ聞こえる。あの先生は、いつも声が大きい。ベンチで男子学生があぐらをかいている。スマホにイヤフォンも付けず動画を再生し、ガチャガチャと喧しい音が辺りに響いているが、本人は自分の部屋にいるかのようにくつろいでいる。しょうがないな

ほんとに、と呆(あき)れた気持ちになるが、こんなところでこうするしかないのだな、と同情心もわいた。大学を出ればこいつも働くんだろう。なんの仕事をするかは知らないが、今は自由だ。動画ぐらい好きなだけ見ていればいい。鹿田は妙に優しい気持ちで学生の横顔を盗み見た。二十歳を過ぎているだけの、ガキの顔をしている。三つ並んだベンチのうち学生が座るベンチの下だけモップがけをせず通り過ぎた時、だらしなく丸まった学生の背中にわずかに力が入った。

大量の人間が出す大量のごみを回収し、トイレを清め、廊下を磨く。決まった道具で決まった通りの手順で、任された担当分をこなしていく。他の清掃員と待機中に雑談はするが深く知り合うことはないし、スタッフはしょっちゅう入れ替わる。仕事の出来を比較されることはなく、褒められも叱られもしない。自分の仕事をする。おれはこれがわりと好きなんだな、と鹿田は満足している。残業もないし、うるさい上司も、無理に仲良くしなきゃいけない同僚もいない。やるべきことは明確で、隅まできゅっと雑巾をかけたら終わりだ。

通常の清掃業務の合間に、鳥を回収するのも決まった仕事だった。鳥が死ぬと、管財課を経由して「回収お願いします」と連絡を受ける。向かった先で、発見者が待っていることも、連絡後立ち去っていることもあった。発見するのは多くの場合学生だった。だいたいが所属学部の教務課窓口へ言いに走る。学生にとって大学の職員というのは、学部の窓口の人間のことなのだろう。教務課から管財課へ連絡が入り、管財課から清掃待機室へ内線がかかる。壁にかけられた内線には手が空いている人が順番に出ていたが、回収の電話は、なぜか鹿田が取ることが多かった。

発見の連絡をした学生が現場にいることはあっても、泣いている学生はあれきり見かけなかった。興味深そうに、じっくり観察してくる学生はいた。中にはスマホで動画を撮る者もいて、鹿田が「撮らないで」と注意すると、はっとしたように「すみません」と謝罪してスマホを下げた。けれどどうせ動画は削除しないのだろうと思った。

っていうことがあったんですよ、と滝に立ち話で伝えると、滝は、学生ってそんな感じらしいですね、と困り顔で笑った。それからはっと思いついたように、

「そういえば、知ってますか？　学生たちが、清掃員のみなさんのことを妖精って呼んでるって」

と言った。鹿田は口を噤(つぐ)み、息を呑(の)んだ。視線を落とすと、自分が身に着けている作業着が目に入った。胸元にプラスチックの名札がピン止めされているが、白くてまともなのはその名札だけだ。肩口に大学名が刺繍(ししゅう)された上下つなぎの作業着は、なぜか目にもまぶしい蛍光パープルだった。

初めて見た時は途方に暮れるような気さえしたが、しかし、職場で決められた仕事着だ。仕方なく着ているうちに、若者だらけの大学の中で、いくらファンシーな色の作業着を身に着けていようと、中高年の清掃員などは透明な存在だと思うようになった。だが、そうでもないらしい。妖精というのは［　1　］、この色からの連想なのだろう。絵本に出てくるすみれの花のような可憐(かれん)な色に染められている、自分の親よりも年上の清掃員たちを、若者たちは「妖精」と呼んでいるのだ。

「妖精って、なんだかいいですよね。気づかないうちにいつの間にか辺りを綺麗(きれい)にしてくれている存在というか。そういう童話がありましたよね。妖精じゃなくて小人だったかもしれないけど」

と話す滝の話しぶりにも表情にも、嘲るような調子はなく、むしろ学生たちの自由で伸びやかな発想をほめているふうですらあった。そんなかわいらしいもんじゃないですけどね、と返しながら、鹿田はけれど、(3)自分の中でぶくぶくと気持ちが泡立っていくのが分かった。じゃあまた、と会釈して滝と離れる。ガラガラと回収カートを押して歩く。いつもなら気にならない両手に伝わる振動がむずがゆく［　2　］だった。

小さな泡ではあった。大したことではないと思ったし、実際大したことではない。自分も若い頃は無責任なことを散々やったし、相手の気持ちや状況など一切考えないで発言した。学生たちの他愛ない言葉遊びだ。こちらを傷つけようという意図も含まないだろう。

通路のベンチで叫び声に近い爆笑を繰り返す集団、学食フロアのゴミ箱のふちがいつもソースや汁で濡(ぬ)れていること、トイレの洗面台に詰まったカップ麺の具やティッシュ、清掃用具カートを持つ鹿田より後に並んだくせに、無言で順番を飛ばしてエレベーターに乗り込まれたこと。

今までは、瞬間的に苛立ったりうるさいと感じたりすることはあったけれど、息をひとつ吸えば「まあ、かわいいものだな」と

達観することができた。自分のしてきたことを考えると、子どもよりも孫に近いと言ってもいいのかもしれない、そんな年齢の学生たちが、若さに任せて騒ごうと失礼を働こうと、元気でいいな、その調子でな、と心の中でつぶやく余裕があった。けれど、自分は透明な存在だから仕方ないと思って流してきたそれらが、妖精と名付けられ存在を認知されたことで、許せなくなっていった。おれたちを妖精と呼ぶくせに、いないことにしたまま扱うっていうのはどういうことだ？　筋が通らないという怒りを抱くのと同時に、ばかばかしくもあった。自分の子どもよりずっと年若い彼らの、その若さそのものに怒ること自体が虚しい。虚しさが諦めに転じていく。

空になった回収カートを押して理工学部棟に戻る。廊下のベンチに学生が一人で座っている。真下に首を曲げてスマホゲームに興じているので、顔は見えない。学生が前方に伸ばした足が邪魔だった。回収カートを押す手に力を入れて迂回する。学生は顔を上げなかったが、清掃員が通ったことは分かったらしい。大きく長いため息を吐いた。当たってもいないだろうに、と鹿田は驚く。それでも前を通っただけでその深さのため息か。スマホを食い入るように見つめる学生の後頭部を振り返る。そこにも傷つける意図なんかないんだろう。諦めに転じかけていた虚しさは、けれど唐突にはじけた。こちらを傷つけようという意図がないからといって、それがなんだ。意図なんかに意味はあるか？　傷つけている側の意図を、傷をつけられた側が汲むんかよ。

考え始めると、滝のことまで許せなくなってしまいそうだった。正職員でありながら立場の違う鹿田にも気さくに話しかけてくれる滝。彼との雑談からもたらされた情報に、この大学の中での視野を広げられたこともある。派遣の清掃員が知り得ない学内の噂話。次の学長選は荒れそうだとか、法学部棟地下学食の店舗が来年撤退するので新しく入るテナントを募集するらしいとか、ブレイクダンスでオリンピック出場が狙えそうな高校生のリクルートに成功したらしいとか。大学以外のどこにも通用しない、けれど学内にいる限りは「ほー」と関心を寄せるような、他愛ない話題だった。蛍光パープルの作業着を導入したのが、今の総務部長の十年前の大仕事のひとつだったということも、滝に聞かされて知った。

滝が親切心から話してくれていることは分かる。彼からしたら、自分はまさに父親くらいの年齢なのだろう。けれど鹿田からしてみれば違う。滝のことを子ども世代だと身近に感じられはしなかった。なぜだろうか。大学生たちのことは「孫くらいだな」

と思えるのに。滝の言動は親切由来だ。傷つけてやろうという意図はない。けれど傷つけないための配慮も、ないだろう。(4)グレーのパリッとしたスーツを着こなす彼は、学生たちから揶揄された呼び名を付けられることはない。

鹿田は四階分のごみを回収し重たくなった回収カートを押して、エレベーターで再び集積場へ降りて行く。おれは透明ではなくなったとしても、なにをぶつけてもいい存在なんだな、とぼんやり考える。働いている間中、手も足も腰も疲れるが、頭の中は暇で、そのせいで考えすぎている気がする。

毎日、回収カートを押す。時々、鳥が死ぬ。擦りガラスにすればいいのにとその度に思い、何回かに一度は報告書で提言するが、無視される。この無視にも、自分を傷つける意図はないのだろうと鹿田は思う。変わらないことを理解しながら働くのは苦しいが、苦しくたって息ができないわけではない。

夏が終わり短い秋がきて、冬が過ぎ、春もまた過ぎた。一学年分の学生が出て行き、一学年分の学生が新しく入って来た。それを一年、二年、三年と繰り返し、自分たちを「妖精」と呼び始めた初めの学生はとっくにいなくなっているのだろうけれど、人間が入れ替わっても呼び名は引き継がれ続けていくのだろう、と縦長のビルの上へ下へ移動し続けながら、キャンパスに詰め込まれた無数の学生たちを眺めて鹿田は思った。腹は立ったが、腹が立ったままでも仕事は滞りなく進められた。好きだろうが嫌いだろうが、憎んでいようが大切に慈しんでいようが、やることは同じだ。

卒業式の日は、特に注意深く清掃に入る。

日本武道館での卒業式典を終えた卒業生たちは、電車やバスで三十分かけてキャンパスに移動して来て、学部や学科ごとに振り分けられた教室に入る。そこで、教員から卒業証書を手渡されるのだ。

清掃も特別シフトが組まれ、卒業生たちがやって来る前に掃除もゴミ回収も終えている。そして学部学科ごとの卒業証書授与が終了し、人がいなくなっているはずの夕方、また清掃に入る。日中よりは減っているものの、袴やぴかぴかのスーツを着た卒業生たちは、いつまでもあちこちに溜まって写真を撮っている。飛び交う会話の端々に謝恩会や追いコン、という単語が聞き取れ、その開始時間まで学内で時間を潰していようということらしい。毎年のことなので鹿田も慣れている。(5)いつも以上に存在感

を消し、透明を心がけて掃除をするが、蛍光パープルであることは変わらない。

男子トイレの様子は普段とさほど変わらないが、廊下のごみ箱にはクラッカーや『祝』の字がある模造紙が捨てられており、可燃ごみは集積場まで往復しないと片付け切れない。反対に、研究活動は休みになるらしく、水曜日ではあるものの、理工学部棟の布巾は出ていなかった。

学生たちの笑い声がいつもよりも真摯に響いた。わざとなにかを貶(おとし)めることで、自分たちを落としそのことでようやく足場を踏みしめているような、あの軽薄さが今日はなく、これが卒業するってことなのかもしれないな、と鹿田は思いながら、耳をス⑤ませてキャンパス内を周回し、ごみを回収していく。

文学部棟の二階のごみをまとめて回収カートへ載せ、大きなごみ袋の口をしばろうと手を伸ばした時だった。

「あの、すみません。これもお願いできますか?」

振り返ると赤色の花が差し出されていた。えっ、と思わず声が漏れる。花を載せた手をこちらへ伸ばしているのは、鳥のために泣いたあの男子学生だった。

黒のスーツに銀色のネクタイを締めている。目が合ったが、学生の方は鹿田に見覚えはないのだろう。変わらない表情を見て、当たり前だ、おれは学内のあちこちに現れる妖精の一人にすぎないのだ、と鹿田は納得する。清掃員は十人だが、学生からすれば一人でもあるし、百人でもあるのだろう。

恐る恐る花を受け取る。それは、手のひらと同じ大きさの、紙でできた花飾りだった。

「これ、お祝いのお花じゃないの」

尋ねると、学生は不思議そうに首を傾(かし)げ、

「そうなんですけど、ピンが取れちゃって、もう付けられないので」

と答える。花を裏返してみると、なるほど裏側の中心にピンが留まっていたらしい糊(のり)の跡があった。

「それにしたって……」

わざわざすぐに捨てなくてもいいだろうに、と辺りを見渡す。目の前の教室の入り口には〈教育学科〉と張り紙がしてあり、中にはまだ何人も卒業生が残っていた。みんな胸元に赤い花を付けている。ほかの学科の卒業生たちの胸元にこの花はないから、教育学科の中で用意されたものなのだろう。確かに、後生大事に保管するようなものでもないかもしれないが、今日一日くらいは手元に持っておいたっていいのではないか。

「ちょっと待って」

と学生を引き止め、鹿田は自分の胸元に付いた名札を外した。裏から安全ピンを抜き取る。プラスチックの名札はつなぎのポケットに入れて、そのピンを紙の花に移し替えた。

「これで使えると思う」

怪訝(けげん)そうな顔をしている学生にそれを差し出し、気持ち悪がられるだろうかと瞬時に後悔するが、学生は手のひらを広げて受け取った。ありがとうございます、と小さくぺこりと頭を下げる。鹿田は「卒業おめでとう」と言ってやりたかったが、いよいよ自分が存在感を増すことに耐えられなくなり、ん、と頷きごみ回収の仕事に戻った。

それからふと、この学生が大学に来るのは今日で最後なのだ、と当たり前のことに思い至る。最後であるならば、伝えてやった方がいいのかもしれない。片手を回収カートの押し手に添えたまま半身で学生の方を振り返る。彼は〈教育学科〉の貼り紙がされた教室の中に戻り、スーツの胸元に赤い花を付けた別の学生と机にもたれて話していた。ピンを付け替えた赤い花は机の上に置かれている。昨日、その教室の床一面の掃除機がけをしたのは鹿田だった。黒板もきつく絞った雑巾で拭いてぴかぴかにした。今そこは、色とりどりのチョークで〈卒業おめでとう!〉という祝いの言葉と、学生たちの寄せ書きで埋め尽くされている。

「あ……」

震えた喉から声が出るが小さすぎて届かない。どうしようかと迷っているうちに、連れの方と目が合う。そいつが、

「え? あの妖精なんかこっちの方見てね?」

と口にするのと、学生がこちらを振り返るのは同時だった。再び重なった視線が届いた、その瞳の奥に戸惑いとわずかに迷惑

そうな色を認め、鹿田は慌てて目を逸らした。手早くごみ袋をしばり、回収カートに載せて歩き出す。同じフロアの反対側にも未回収のごみ箱があったが、一旦集積場へ戻ろうと決めた。いつの間にか日が暮れようとしていた。薄暗い廊下をエレベーターに向かって進んでいく。

あの日、窓ガラスにぶつかった鳥は、脳震盪を起こして気絶していただけだった。

ちり取りで回収した鳥からビニール袋を取り払い、ごみ集積場がある地下一階から、地上まで吹き抜けになっている清掃業者用通路の植え込みに置いておいたら、二時間後には飛び去って姿を消していた。

鹿田はこの大学で鳥を回収した時、いつも一度は植え込みに放置する。ほとんどは時間が経ってもそのまま死んでいるが、何度かに一度、目を覚まして飛んで行くからだ。前の大学で裏山の麓に鳥を埋めようと穴を掘っていた時、死体に被せたビニール袋がばさばさと音を立てて暴れ始めて悲鳴を上げて以来の習慣だった。死んでいるんだか、気絶しているんだか、見ただけでは分からない。

(6)鳥が死んだと思って泣いていたあの学生に、もっと早く教えてやればよかったのだけど、狭いはずのキャンパスの中で、鹿田は彼を見つけることができなかった。顔は特別に覚えていたものの、四年間で学生の見た目など驚くほど激変するから、彼を見たとしてももう分からないかもしれない、顔を覚えていても意味などないかもしれない、とも思っていた。けれど今日、彼が彼だとすぐに分かった。

分かったけれど、伝えられなかった。生きていたよと伝える、そのことに今更どれだけの意味があるかも分からないが。

チン、と高い音が鳴ってエレベーターの扉が開く。中から袴姿の女子学生が二人降りて来る。回収カートを持つ鹿田の姿は相変わらず透明で、まるでそこに誰もいないかのような軽やかさで通り過ぎていく。地下へ降りるエレベーターに乗り込むのは鹿田一人だけだった。つなぎの生地越しに、ポケットの異物が太ももに触れている。(7)透明になれ、と鹿田は口に出してつぶやいてみるが、エレベーター内の大きな鏡には、鮮やかな蛍光パープルに包まれた鹿田が煌々と、名札を失くした姿で映っている。

（高瀬隼子「妖精の羽ばたき」による。）

問一　傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二　傍線部(1)「彼が鳥の死に驚いて泣いてしまったのは、ここが都会のオフィスビルみたいなキャンパスだからではないだろうか？」とあるが、鹿田は男子学生が泣いていた理由をどのように推測しているか。「田舎」と「都会」という言葉を使って説明せよ。

問三　傍線部(2)「清掃の仕事はいい、と鹿田は思う」とあるが、なぜ鹿田は「いい」と思っているか、四〇字以内で簡潔に説明せよ。

問四　空欄 1 2 に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

1　ア　もしかしたら　イ　当然　ウ　逆に　エ　偶然にも

2　ア　奇妙　イ　空虚　ウ　驚き　エ　不快

問五　傍線部(3)「自分の中でぶくぶくと気持ちが泡立っていくのが分かった」とあるが、「気持ちが泡立っ」たのはなぜか、説明せよ。

問六　傍線部(4)「グレーのパリッとしたスーツを着こなす彼は、学生たちから揶揄された呼び名を付けられることはない」という一文が意味するものとして適当なものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア　鹿田は、滝が学生たちから一定の敬意を持たれていて、「妖精」などと呼ばれることはないからこそ、学生たちに肩入れし、自由で伸びやかな発想を褒めるという態度を見せていることに気が付き、怒りを覚えている。

イ　鹿田は、長く勤めた仕事を仕方なく辞め、気に入らない蛍光パープルの清掃着を着なければならない自分とは違って、仕事場でパリッとしたスーツを着こなし、やりがいのある仕事ができる滝を羨ましく感じている。

ウ　鹿田は、パリっとしたスーツで仕事をする滝には、自分の子どもより若い学生たちに、可憐な清掃着の色から連想した「妖精」という名で呼ばれていると知った鹿田がどう感じるか、想像もつかないだろうと思っている。

エ　鹿田は、滝と学生たちについて、年代や服装こそ、自分にとっての子どもと孫くらいの違いはあるものの、無責任で相手の気持ちや状況を考えられず、意図せず傷つける点ではどちらも同じであると諦めを覚えている。

オ　鹿田は、滝は自分とは違う職員という立場であり、パープルの清掃着を着ることもなければ、学生たちから「妖精」と呼ばれることもないため、自分の気持ちは理解できず、傷つけないための配慮もしないと考えている。

問七　傍線部(5)「いつも以上に存在感を消し、透明を心がけて掃除をする」とあるが、この時の鹿田についての説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　自分と晴れやかな学生の差を感じ、自分は存在しないものとより強く言い聞かせて、心が荒れるのを防いでいる。

イ　きれいにしておかなければならない晴れの日に、自分のような存在が目立ってはならない、と自重している。

ウ　これから社会に出ていく学生に対し、目立たないながらも懸命に働く自分の姿を見せておきたいと考えている。

エ　輝いて見える学生への憎悪を悟られるとさらに揶揄されるかもしれず、そうした気持ちを隠そうとしている。

問八　傍線部(6)「鳥が死んだと思って泣いていたあの学生に、もっと早く教えてやればよかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　透明なガラスにぶつかって死ぬことがいかに悲しいものであるか、気持ちを分かち合えると思ったから。

イ　亡くしたばかりのインコと死んだ鳥を重ね合わせて悲しむことは、事実と違い無益だということを伝えられるから。

ウ　鳥が死んでいなかったことを伝えることで、不安な気持ちを少しでも和らげてあげられると思ったから。

エ　意識して軽薄を気取る学生とは違い、鳥の死を悲しむことができるのは素晴らしいことだと感じたから。

オ　透明な存在でありたいと願う自分でも、人目を気にせず泣いてしまうことはあるだろうと考えたから。

問九　傍線部(7)「透明になれ」と鹿田が口に出してつぶやくのはなぜか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　鹿田は学生たちが清掃員の仕事に注目し、清掃員たちを「妖精」と認識していることに気が付き、自分の存在が恥ずかしくなる。学生たちに見られても恥ずかしくない自分になりたいと思い、「透明になれ」とつぶやいている。

イ　鹿田は「妖精」という可愛らしい呼び名に反して、清掃員が学生たちにとって迷惑な存在だと気づいてしまう。知らず知らずのうちに他者を傷つけてしまう清掃員としての自分から逃れたいと思い「透明になれ」とつぶやいている。

ウ　鹿田は学生たちが清掃員を自分たちとかかわりのない「妖精」と認識することで、声をかけられることを迷惑だと感じていることを理解してしまう。学生たちにかかわるために、「妖精」としての自分から逃れたいと思い、「透明になれ」とつぶやいている。

エ　鹿田は学生たちから一人の人間でなく清掃をする「妖精」として見られていることを自覚し、自らの姿を意識してしまう。学生たちから規定される「妖精」としての自分から逃れたいと思い、「透明になれ」とつぶやいている。

三、次の文章は『十訓抄』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

堀河院の御時、中宮の御方に半物[注1]に砂金といひて、ならびなき美女ありけり。兵庫頭源仲正[注2]なむ想ひける。その時、殿[注3]の前駆の人々、鴨井殿に集まりて、酒飲みけるついでに、ある人、かの砂金がことを語り出して、「一日、内裏にてねり出でたりし有様は、天人[注4]もこれにはまさらじとこそ見えしか。世にあらば、かやうなるものをこそ、この世の①思ひ出にもせまほしけれ」といふ。「鬼、醜女をも、ものならず思へる武士は恐ろしきものぞ。想ふともかなふべからず、②無沙汰にてありなむ」といふ。佐実といふ人、さかしだちたる本性にて、「いなや、武士も女のかたには惚るるものなり。おのれは盗まむとだに思はば、仲正、いかに守るとも、それに障らじ」といふより、何を仇とか思ひけむ、仲正がことをあざけり、をこづくやうにいひければ、かたへは詞少なにて［ a ］にけり。

このこと、たれが中言したりけむ、仲正かへり聞きて、「やすからぬことなり。男ども、いかがすべき。かれ、弓矢の本末[注5]知らず。敵にあらねば、よしなきことなれど、③さりとて、さてやまむにはやすからず。形ばかりおどさむと思ふなり」といひあはせければ、「いとやすきことなり」とて、夕闇のころ、殿より出でけるを待ちうけて、車より④引き落して、⑤「さることいはじや」と怠状[注6]せさせて、ゆるしてけり。これを仲正が郎等の中に、ことにものの心も知らず、情けも哀れもかへりみ［ b ］田舎武者の一人ありけるが、このことをのちに伝へ聞きて、馬にて馳せ来たりけるが、いま起き上がりて、小家に⑥這ひ入らむとしける時、行き合ひて、何ともいはせず、もとどりを押し切りて、仲正がもとに行きて、「これ、奉らむ」といひければ、仲正、「⑦かほどは思はず。不思議のことしたり[注8]」といひながら、かひなきことなれば、さてやみ［ c ］。

このこと、佐実こそわが身のため思ひて、口より外へも出さねど、かばかりのこと、⑨さてやまむやは。院、聞こしめして、下手人など召されて、きびしく御沙汰あるほどに、「佐実、もとどり切られにけり」といふこと聞きけるを、ぬしも仲正もあらがひ申しけるによりて、重き罪にはあたらざりけれど、「切りたる者、某」と、たしかに聞こしめして、その郎等を［ d ］に、

跡をくらみて失せぬ。

（本文は「新編日本古典文学全集」〈小学館〉による。一部改変を加えている。）

注1　半物――それほど身分の低くない召使の女。
注2　兵庫頭源仲正――「兵庫頭」は兵器等を管轄する兵庫寮の長官。「源仲正」は平安後期の武将。頼政の父。
注3　殿の前駆――「殿」は殿下（摂政、関白の敬称）のこと。藤原忠実あるいは藤原師通など諸説あり。「前駆」は馬に乗って貴人を先導すること。またその人。
注4　醜女――地獄に住む女の鬼。妖怪。
注5　弓矢の本末知らず――弓矢のことなど何もわからない。
注6　怠状せさせて――謝罪状を書かせて。「怠状」は謝罪の文の意。
注7　もとどり――髪を頭上で束ねたところ。もとどりを切ることは、屈辱や処罰を与えることを意味した。
注8　不思議――非常識なこと。けしからんこと。

問一　傍線部①「思ひ出にもせまほしけれ」といふ」について、例にならって文法的に説明せよ。なお、例は一行だが、二行以上で書いてもよい。

例　弓矢（名詞）の（格助詞）本末（名詞）知ら（動詞・ラ行四段活用・未然形）ず（打消の助動詞・終止形）

問二　傍線部②「無沙汰にてありなむ」を現代語訳せよ。その際、「無沙汰」は別の語に言い換え、なおかつ「誰に対して」ということを本文より補いながら訳すこと。

問三　空欄a～dに入る最も適切な語を、次のア～クの中からそれぞれ一つ選んで記号で□に記し、さらに適切な活用形に改めて〔　　〕に解答せよ。

語群　ア　逃ぐ（動詞）　イ　やむ（動詞）　ウ　害す（動詞）　エ　いざなふ（動詞）　オ　召す（動詞）
カ　さす（使役の助動詞）　キ　ず（打消の助動詞）　ク　ぬ（完了の助動詞）

問四　傍線部③「さりとて」は、【AさりとてB】のようにAを受けてBを続ける接続の表現である。AとBに当たる内容を、それぞれ答えよ。なお、Aについては、主語を明らかにした上で、さらに「武芸」という語を用いること。

問五　傍線部④「引き落して」、⑥「這ひ入らむ」、⑧「したり」のそれぞれの主語は誰か。本文中の語句を用いて答えよ。

問六　傍線部⑤「さることといはじや」について、次の問いに答えよ。

Ⅰ　「さる」が最も端的に指し示す箇所を本文中より特定し、最後の五文字（句読点、記号は含まない）を答えよ。

Ⅱ　「さることといはじや」を現代語訳せよ。ただし、「さる」が具体的に指し示す内容は訳さなくてよい。

問七　傍線部⑦「かほどは思はず」とあるが、「仲正」のどのような思いに反して、誰が何をしたのか。本文を踏まえて答えよ。

問八　傍線部⑨「さてやまむやは」について、次の問いに答えよ。

Ⅰ　「さてやまむやは」を現代語訳せよ。

Ⅱ　「やまむやは」は、どのようなことが、実際にどうなることを見通して述べているのか、具体的に説明せよ。

問九　『十訓抄』と同じジャンルの作品として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選んで記号で答えよ。

ア　『栄花物語』　イ　『方丈記』　ウ　『平家物語』　エ　『宇治拾遺物語』　オ　『大鏡』

四、次の文章は、唐代の絵師であり、朝廷では「右相」（宰相クラスの大臣）にまで至った閻立本（えんりつほん）について記されたものである。これを読んで後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお設問の都合で訓点を省略した箇所がある。

太宗与侍臣泛遊春苑池中有奇鳥随波容与上愛玩不已①召侍従之臣歌詠之急召立本写貌閤内伝呼「画師閻立本」立本時已為主爵郎中奔走流汗俯伏池側手揮丹素目瞻坐賓不勝愧赧退戒其子曰②「吾少好読書属詞今独以丹青見知躬厮役之務辱莫大焉③爾宜深戒勿習此芸」④然性之所好終不能舎及為右相与左相姜恪対掌枢務恪曾立辺功⑤立本唯善丹青時人謂千字文語曰⑥「左相宣威沙漠右相馳譽丹青」言並非宰相器⑦

（『歴代名画記』による）

注　○太宗――唐の第二代皇帝李世民。　○泛遊――船遊びをする。　○容与――遊び楽しむさま。
○閤内伝呼――殿中で呼びまわる。　○主爵郎中――朝臣の官職名。　○丹素――赤と白の絵の具。
○愧赧――顔が赤らむほどの恥ずかしさ。　○属詞――詩文を作ること。　○丹青――絵画。
○躬厮役之務――身分の低い者の務めをみずから行う。　○姜恪――人名。
○対掌――二人で担当する。　○辺功――「沙漠」のある辺境で異民族を討伐した手柄。
○千字文――当時識字教育に広く使われた書の名。その中に「宣威沙漠、馳誉丹青」の二句がある。

問一　傍線部①「与」、⑦「然」、⑧「終」、⑨「謂」の読みを、送りがなも含めてひらがなで示せ。

問二　傍線部②「愛玩不已」を、送りがなも含めて全てひらがなで書き下し文にせよ。

問三　傍線部③「時」の意味として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び記号で答えよ。

ア　一時　　イ　常時　　ウ　当時　　エ　臨時　　オ　平時

問四　傍線部④「今独以丹青見知」の書き下し文として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えよ。

ア　今独り丹青の知を見るを以てす。
イ　今独り丹青の知らるるを以てするのみ。
ウ　今独り丹青を以て知を見るのみ。
エ　今独り丹青を以て知らるるのみ。

問五　傍線部⑤「辱莫大焉」を現代語訳せよ。

問六　傍線部⑥「爾宜深戒、勿習此芸」によって、閻立本は子どもに何を伝えようとしたのか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えよ。

ア　自分は若年時より読書や作詩が好きであったが、絵が上手であったばかりに、徐々に作詩をおろそかにするようになってしまった。詩人として大成することを望むなら、絵など上手にならないほうがよい、ということ。

イ　自分は若年時より読書や作詩が好きであったが、絵が上手であったばかりに、今は身分の低い者と同様の扱いを受けている。私のような目に遭いたくなければ、絵など上手にならないほうがよい、ということ。

ウ　自分は若年時より読書や作詩に励んできたが、今は身分の低い者と同様の扱いを受けている。皇帝に絵を評価されなければ意味がないので、読書や作詩ではなく絵の練習をしたほうがよい、ということ。

エ　自分は若年時より読書や作詩に励んできたが、今は絵師として仕えている。いくら好きでも才能がなければ大成しないので、自分に合っているものをよく見極めて努力すべきである、ということ。

問七　傍線部⑩「「左相宣威沙漠、右相馳誉丹青。」言並非宰相器」とはどういう意味か。七〇字程度で説明せよ。